

17 モクの木

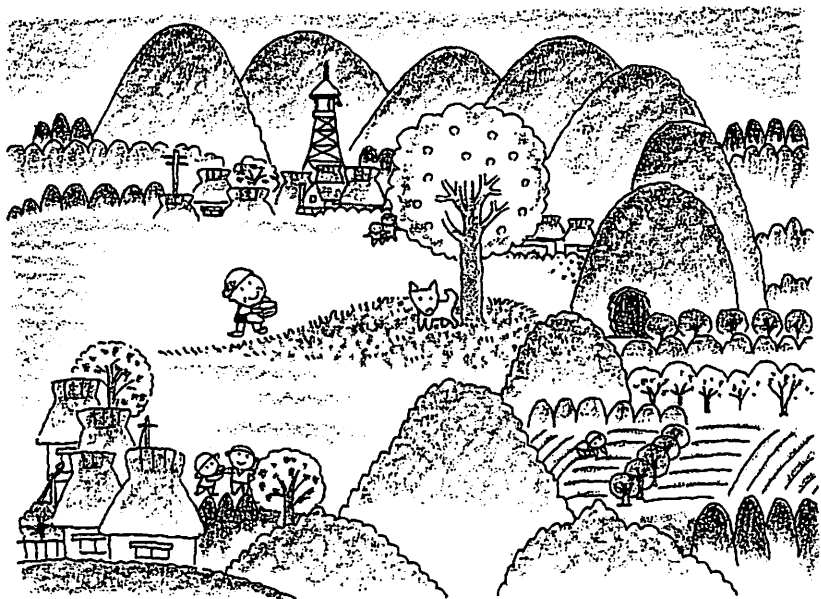


おく深い^{ぶか}しずかな山あいはくもくれんに小さい村がありました。その村の
ほどに小高い草原があつて、そこに一本の大きな白木蓮の木が
立っていました。村人たちはこの白木蓮のことをいつも「モク
木」とよんで、それはそれは大切にしていました。じつはこの「モ
クの木」のモクというのは、やさしかった一ぴきの白い大きな犬
の名前なのです。

そのころ、日本の国はつらく悲しい^{かな}せんそうをしていました。

せんそうはだんだんはげしくなり、
連日^{れんじつ}のようにてき機^きの空しゆうが
つづきました。

そんなある日、一ぴきの白い大
きな犬がこの白木蓮の下にやって
来たのです。空しゆうにあつたど
こかの町からにげてきたのでしょ
うか。食べ物^{もの}にこまってかい主^{ぬし}か
ら見はなされたのでしょうか。と
てもさびしい目をしてつかれきつ
たようでした。心のあたたかい

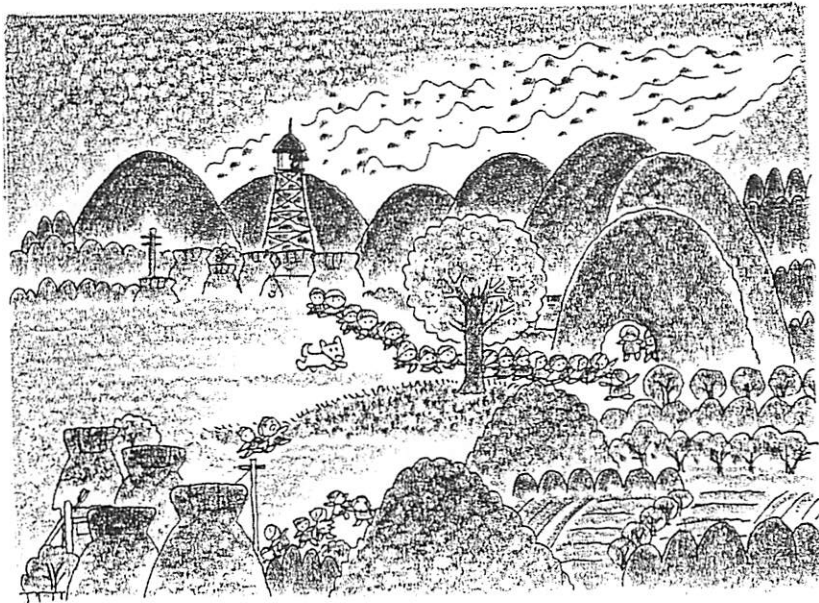


村の人たちはそんな犬を見ずてすることはできません。自分たちの食べ物さえ不自由な毎日でしたが、みんなは少しずつこの犬のためにはえさをととのえてやりました。なかでも一人むすこをせん地に送り出しているすえおばさんは、むすこが犬ずきだったからと、ことのほかこの犬をかわいがりました。村の子どもたちも、いつの間にか白木蓮の木をとってこの犬に「モク」という名前をつけました。モクは村人から「モク」とよばれることをとてもよろこびました。

モクが来て二か月がたち、モクはすっかり村の人たちとなかよしになりました。そんなある夜ふけ、モクのけたたましい鳴き声

が村中にひびきわたりました。モクは体中の毛をさか立てて、すさまじくほえながら村中を走り回っているのです。モクはもう年をとっていましたから、ふだんは大きな声でほえることも走り回ることもなかったのです。

村の人たちはおどろいてとび出しました。そしてはるか山の向こうの空が真っ赤にもえているのに気がつきました。



「となり町がもえている、空しゆうだ。」

「こちらにもやってくるぞ。」

村人たちはあわてふためきました。まさかこんな小さな山おくの村にまで、てきがやってくるとは思ってもいなかったのです。みんなはひっしになって山おくにある大きな岩あなへにげました。そんな間も、モクは自分のありったけの力をふりしぼるよう走り回って、にげおくられている人たちを岩あなへ追いたてるようにほえ続けました。

おそろしい空しゆうの一夜いちやが明けると、この小さな村はあちらこちらやけ野原になっていました。でも村の人たちは全員ぜんいんぶじでした。

しばらくしてみんなはモクのいないことに気づきました。モクが鳴いて知らせてくれなければ村人たちはどうなっていたかわかりません。

みんなは、

「モク、モク」

とさけんで、白木蓮の草原に走りました。白木蓮は葉を少しこがただけでぶじでしたが、モクは白木蓮の下にねむったように横たわっていました。

「モク、モク」

と、すえおばさんがよぶと、モクはそつとやさしい目をあけまし

た。そしてみんなのぶじなことを見とどけると、安心あんしんしたようにそのやさしい目をとじてしまいました。みんなは、

「モク、ありがとう。」

と行って、声をあげてなきました。村のみんなをすくうためにやってきたようなこのモクは、村人たちの手で、ていねいに白木蓮の下にほうむられました。

間まもなく八月が来て、この長くつらかったせんそうが終おわりました。すえおばさんのむすこもぶじに帰ってきました。すえおばさんは、

「モクが身みがわりになってくれたんだ。」

と行って、元気なむすこを見てなきました。

よく年の春、この白木蓮は一だんと美うつくしく数え切れないほどの花を天に向かってさかせました。そしてその花びらがやさしい風にふかれてポトポトと土の上に落おちるとき、村の人たちはそこに、あの白いやさしかったモクが帰って来たように思いました。

白木蓮がさくころになると、村人たちはいつもやさしかったモクのことを思い出します。そしていつのころからか、この白木蓮のことを「モクの木」とよぶようになりました。

17 モクの木

3-(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。(畏敬の念)

①主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

人は本来、美しいものや、気高いものにあこがれをもっている。そしてその美しいものや気高いものに接することによって、人の心の奥深くに自らの心を磨こうとする気持ちが存在するようになる。したがって教育の場で、その契機を作ったり、そうした心情を育てたりすることが、美しき心情、崇高さへのあこがれの気持ちを抱かせるために必要である。また普段から、美しいものを美しいと感じるような心情を大切に育てていきたい。

〈子どもの実態について〉

この期の子どもの心は、素直で元気いっぱいだが、毎日の生活に追われ、美しいものを美しいと感じるような、生活のゆとりはない。というよりも、そういう美しさを感じるような環境の中で育っていない。それは、現代社会の中で美的環境が少なくなっているのも原因であろうし、周囲の大人が感性を養っていないことも原因であろう。

そこで、この期に周りに感じられる美しさや気高さに気付き、それを大切にしようとする心情を育てたい。

〈資料について〉

戦争中、白木蓮の木の下に一匹の犬が住みつき、村人は自分たちの食糧さえ不自由な毎日であったがえさをやってくわいがった。ところが空襲のとき、モクは村人を救う為に力の限りほえ続け、やがて身代りになって死んでしまう。

力の限り走り回って、逃げ遅れている人達を岩穴へ追い立てるようにほえ続けるモクの心情をしっかりと考えさせ、我が身を捨ててまで村人を救おうとするモクの気高さを感じ取らせたい。そしてモクと村人の温かい心の交流と、モクの行動のすばらしさに気付かせることによって、子どもたちの内に潜む良心を揺り動かしたい。

②ねらい

美しいもの、清らかなものを大切にしようとする心情を育てる。

③展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
(1) 美しいものとは、なんであるか話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。
(2) 資料「モクの木」を読んで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの心に残った感動を大切に授業を進める。 ・ 背景となる戦時下の様子を補説する。 ・ 村人と犬との素朴で優しい心の交流に目を向け、その清らかさに感動できるようにする。
① お話を読んで心に残ったことはどんなことでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ としをとっているモクが村人をたすけるためにほえ続けたのはすごい。 ・ 村人の身がわりになって死んでいったモクがかわいそう。 ・ 食糧がないときに、モクにわけてあげた村人は優しい。
② この村にやってきたモクは、村人たちのことをどう思ったのでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ なんと、優しい人たちだ。 ・ モクといわれてうれしい。 ・ ここにきてよかった。
③ 空襲に気付いてほえているモクは、どんな気持ちだったでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 村人をどうしても助けたい。 ・ お世話になったので恩返ししたい。 ・ みんなの役に立ててうれしい、がんばろう。
④ 「モクありがとう。」と泣いている村人たちの心の中は、どうだったでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身がわりになってくれてすまない。 ・ やさしかったモクのことはずれないよ。 ・ モクを白木蓮の下にうめてあげよう。
(3) 自分たちの生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 清らかな心情に触れた感動的な経験を発表できるようにする。
○ 今までに、見たり、聞いたり、読んだりしたことの中で強く心を打たれたことは、どんなことですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 飼い主を追って犬が何百キロも歩いた話を読んだすごいなと思った。
(4) 教師の説話を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師の経験談や感想を加えて授業をまとめる。

